



幼兒の聽覺

松本孝次郎

聽覺は兒の胎内に在る間はなき筈である。即ち空氣の振動が未だ耳内に入らず、刺戟するものがない爲にきこえぬ筈である。生れて後直にも、眞にきこえず、之は生理的聽覺器十分に整はず、かつ鼓膜内にある空氣の分量少なく、鼓膜の振動不十分な爲である。赤兒でも強い音のした時に身を振はせるが、之はきこえたのでなく、音の振動が皮膚に觸れた爲である。さて追々發育すると左右耳共よくきこえるやうになつてゆく。左右の耳が

あるのは眼に左右あると同じく一方でもよいのであるが、二ある方が便利なのである。即ち音の方向を判斷するにはたしかに二ある方が便利で、左方の事は左耳で右方は右耳でよく定めるのである。しかし目の助がなければ、十分音の方向を定めることはできない。其證據には目かくしあそびをする時に、大に音の方向をあやまるものが多い。一体耳は知識と愉快と兩方の機能になる大切なものである。

耳は外部から見ると耳殻が不用のやうに思はれるが、幼兒にとりて大に必要なのである。耳殻に異状あるものは屢々精神的にも異状がある。例へば大きすぎるもの、小さすぎるもの、左右の大きさがちがふものの如き、屢々精神的欠損を有て居る。そこで耳殻をば精神的作用をあらはすものと

して、外行から觀察することが必要である。

聽覺に欠點のあるものはよほど多い。視力に關係した欠點は早く見付かるけれども、耳の方は容易に見付からない。それで生徒の中に耳の不完全なものば割合に多い。又耳其物がわるくなくても咽喉がわるければ聽力が減る。之は鼓膜にゆく空氣が少い爲である。又左右どちらか一方の欠點あるものは甚だ多い。故に幼兒の席順もよほどよく考へて、よくさこえる方を教師の方に向けてかく必要がある。耳のわるいのは十分治療するとすぐなほるので、殊に咽喉からきたのは治療さへすればすくなほる。

聽力に申分のある兒が、大人から何か命ぜられて、それをまぢがへたり、又は知らぬやうにして居ると、大人はそれを身体からと考へずに、意味

ありてするものとして叱る、兒は逆上せる、さこえぬとなりて長ずるほど著しくさこえぬやうにすることあり。之等はひがんだ心をもつやうになりて心性上甚だよろしくない。少し氣のまはり方がのろいばんやりしてをるなど、いふ様なものは、直に耳はどうかと注意すべきである。そうして早く救はなければならぬ。

一、教師母親などが、いつもあまり大きな聲で話すのはよろしくない。必要なだけの聲を落付て出すべきである。必要以上大聲を出す、音の辨別力をよわくする。海岸に住む漁夫はいつでも浪の音をきいて居ますから、それになれて大聲でなければさこえない。

又教師の聲の大きすぎるのは、生徒の注意を集むる上に害がある。そも注意には有意的、無意的

の二があつて、幼き時ほど無意的注意を呼起す必要がある。それには聲といふものを如何に利用すべきかといふに聲を少しかへて、刺激を強くし且つ少しゆるりとするのがよろしい。即ち大事の處は聲を強くしてゆるやかにするので、之は幼児の理解をするだけの猶豫を與へることになる。此聲の點に付ては英國の教師は甚だ巧である。

幼児自身耳を保護するといふ考を入れてやるべきである。幼児はよく耳をおもちやにするが之はよほど氣をつけないければならぬ。耳をひつぽるとか石筆をいれるとか皆よくない。物の入りし時にいちるとなは奥に入る。こんな時には自身でいぢらずに直に教師に言ふやうに注意しておく必要がある。又耳の傍を打つのは危険である。

耳の教育、之も實に肝要である。即ち音の高さを

よく區別するやうに練習することが必要です。なほ音のつよさを辨別するやうにするがよろしい。そうして之等は幼児の時にすべきである、音樂的の耳は幼稚の時にしなければ甚だおそい。指の練習も幼時にしなければならぬのと同じことである。音色といふものは其音を發するものに由て違ふものである、それで物と其音色との關係を知らせるといふことは甚だ必要である。耳はよく練習すると一秒に五万以上の振動數を有して居る音でも辨別する様になる。此音の辨別の力は動物に由りてもちがふが、人でも練習に由りてよほどちがふ。一体日本の人は音に於てよほどつんばになつて居る。色に色盲あるも同じです。

耳は氣候の工合に由りて注意せねばならぬ。寒い風があまり入るのは耳に害がある。だからあま

り寒い時には綿を少し入れておくのがよろしい。
 幼児が言語を言ふやうになるは初は他人の言ふ
 のを聴いてまねるのである。ですから耳が不完全
 な兒は言ふことも不完全である。耳と發音は相伴
 ふものである。

因みに云ふが、吃りはなるべく一度でもどもら
 せぬやう叱らず笑はず氣永くなほすべきで、初め
 音をひつばるやうにして導いてやるがよろしい。
 即ち赤と言はせるにはアーカと言はせる類です。
 又呼吸の練習が必要です。そうしてうまく言はれ
 た時にはほめてやつて、言はうとする心をふり起
 してやるがよろしい。又物を言ふ前に、拍子をと
 りて後言はせ、又は言ふと同時に拍子をとらせる
 がよろしい。

物を言ふには耳のみならず目の方も助ける。即

三十四
 ち他人の話す蒸に、其口を見て居るので盲目の人
 の口の動かし方が見苦しいのは人の口の動き方を
 見ぬからである。又目で場處を見て其處に必要な
 だけの聲を出すことも必要である野卑な大聲は是
 非共矯正しなければならぬものである。

小笠原父島の二見港(承前)

や て

大村は群島中の都とも稱すべき地で、一連の山
 脈は背後を擁し、海岸には一帯の林樹風潮を防ぎ、
 園圃も能く開けて居り、市街は主線をなして軒を
 並べて居る。戸數は二百六十五、人口千二百八で
 わつて、本群島、硫黄島、南鳥島を管して居る小
 笠原島廳を初めとし、父島區裁判所、父島郵便局、
 尋常高等小學校等皆此村に在るのである。毎月一